



其乃甲親

卷尾



晋子雪中ハ蕉翁の羽翼  
あり晋子雪中と巴人菴  
束阿乃左右の師ハ阿叟  
と又先人ハ師也此を以テ  
其系譜の正さをもて  
所おおよそ乃筆を以テ  
リてかの肖像を写  
して道徳の象とす

廣英文庫

先人の旧知あるゆゑと家  
 相志をこる諸子の句と  
 を松ひひ父り志を継と  
 父り靈を願すは尸  
 志のゆゑ

八董



稲妻やふしのあふ東より西

晋其角

古いやわ

蛙といゆ

水乃を

芭蕉翁

黄子しく白菊その  
 あり方名りあしむか

雪中菴鹿雪

鄧月泉巴人後以巴人為菴号  
更名宋阿别  
号夜半亭

啼

川

蟬の

夕影



夜半亭号無相画  
門人高儿董書

高儿圭後更名  
宋是号儿圭菴

風乃 兼忍  
あしめめの花



春名の部

よものうと終日のいせし  
あふ蕪村  
あふはとこりやあふ乃松上  
以董  
千金の雨おん捨え  
あふ厚子夷  
あふ序の歌く隣  
あふ是為拾  
伏見南の眺を

鳥空く生駒のけく  
あふ水移竹  
五器血をばあ家也  
あふ春の水  
以董

此の日ははるすれと猫乃恋。且尔  
苦ハ花の跡しと梅のすら所。一扇  
○空前の起てよよきし春の雨。白波  
かりり乃魚つかはにあまじか。太袂

暮春

此く水千一の書花の日記。五律  
日乃阿を洗せしを花のぬみ文  
くたさ藤お使三夜や春の雨。山董

物尸やうらみの多あまそ。垣 朱英

○るじしと笑て下もあ蘇。小壺角

人し常し嵯峨お遊りはあまじ。牛行

ゆら春や竹の状を成るう。鳥西

鶯や木を井端えしりもとう。百池

苗代やあつ見神。宿の毒。山董

卧龍梅をんまうらと

人め屋敷京あし梅り初をか竹護

〇あにそゆや京をさるるは鳥宿 蕪村  
 山をよや菜の花鳴鶴 春をさる 馬南  
 瘠のよや酢蔵のりや 二三足 小董  
 宿の歌に口も酔ふある女の気 九湖  
 水門を柳乃叩く月夜は南雅  
 いもあや捨る志む町乃松 報吉  
 〇水も舟を揺るる思ふや 徳月 三峽  
 一里ゆきし二里に 深ふらん 三島坊

川波の指ふとく 柳の歌 郢里  
 衣敷を披ひる末の柳乃 仙  
 麓の氷のつらきよも川日か 一嵐  
 七夕乃さしりひたさく 沙千あか 矩州  
 春の風溜る川にあらはる 如本  
 持しりと鳥のあきと 梅乃花 子風  
 雪はさか ぬきさるてんあ乃 春 李完  
 〇とをゆふいさる 栗の枯葉まの形 蝶屋

むしるまはし神の志ありし

都方よりとこりて信公の女也ん 羅江  
松茂といはるる日あはれはらうら 八董

が神をえし此のえまねれ被るぬ 宋屋

○花さしやうとてまゝおら因果經 氏然

えりや非をあらゝとむ非也しめ 紹廉

おろまや鶏たつしそ菜賣と雪

○神鳥乃孫の跡てゆゝたの氷 祇空

菜の花や黄びり色乃經の色 答也

えられをゆめのふれもまらぬ 徳圃

○洗足の盥も漏るしゆ花や 蕪村

花をばりて吉の春を惜しめ 春武

勝おややけ居れ流るの月の松 晋也

○柳をさしは皮むれりく花あり 土發

○雨をゆり春乃名跡や茶一椀 八董

青柳や二三し三節未未より 柳居

エト

盃もさしと街ん牡丹のふ 嘯山

致仕

飽乃ん丸りやせぬ丸りや 杜口

人あつた上戸あるん なり月 鳥門

寒くぬはらふ世の人を 一掃廣 和流

川下子新階も何れを 志藪賣 光甫

毎年の長逗留や 三日雨 三角

青んめをんを毛りる 旭子 春海

雪もせも 何丈積ん 五月雨 十拾

春鳴やし草もえあつた垣根し 免是

削をとりて可しとやせん 初饗 沙月

あつたたり懸るん 二人から 水翁

ぬもよお夜をいおつちの 二葉外 由福

曉乃一言ぬ 一本も 呂波

時をさのあつし 一人と鳥 惟駒

昔もさしとあ世をいおつち 水の上 羅を

干綱子一巻くれ 終る 叢里

東中



梅の木のや実のあまのよ 歌の五律  
来畑子 管のつゝの毛の  
小豆餅 賣てくまき 異の青賦  
種く乃 供養も 果て合歡心 子鬼  
伊のこまの月輪をて 白さる 自笑  
郭公工藤乃うを 寤入る 鉄僧  
湖の水とて せめて 田う せめて 八董  
ある處の北日 せめて 北日 せめて 馬南

おのり 先へ 蓮の来雨  
阿の月のも 浮葉や 草の上 曲室  
もも 足も 只の 田植る 九湖  
灰け桶の 輪も 入る 魚赤  
五斗 俵乃 女を せめて 八董  
山ひとら 丹陽の 岩 百池  
夕影の 秋ハ 煙 飄る  
古井や 蚊の 魚の 蔭 蕪村

古書を風にまきやるとおどけ入竹護  
夕陽にやまあけかたを夢 雀英  
何骨ら肥く火いささき時 如本  
古乃道をぬけえたる 蟬の色 岩岸  
こけおや 寄る窓のにおほし 明五  
昔おとくも火禁を家入りく 文皮  
皆乃魚の船を馳りく 泉月夜 徳野  
紙のしずくのおそ 石川りりき 渡牛

日成りや 蟬ハ胸を滝乃を 釘夫  
律多村のくををぬり 清涼の童  
栄垣乃さるも 打ちる 暑さ <sup>十二六</sup> 周采  
川のまや 志の傘乃をくら 杵延

閨怨

とあやめあれといひんを 獨り飛 太袂  
書窓懶眠  
昔の向ハ尻くくぬけさるほら 芥子 蕪村  
こゝろをさるぬを 握く 田くしか 九圭

柳の風に啼くは春夜の初はらり素山  
管見や此の管見一舟のし啼眉  
あつたまきしるや管乃水えあき孤相  
夜通しよ壁津あゆむ物あはル董  
と火の気のもよ涼のぬ李琳  
心あはし石よえくあはらさか立始  
とびうそ直にやあやる祝風状  
あつたまきしるや  
今や春富土の祜の鴨牛一仙鶴

託物の歌

踏踏と足もそふるやあきの託かりて瓢水  
とらうしと宿る鳥あし十三夜杜口  
啼鹿や昼見し形乃已すれは梅貫  
清光の目をあゆませる末のあ五友  
さあしあし機織中たあるが菊溪  
光るあしと夜はあきのし家の玉古梁  
島原も童の都はあきの海有雲

○白つゆ乃のちる力や草の尖ナハ万翁  
○曉乃雷晴をきてりさの純ル董  
まよさるる金乃蔓やとおの鉄斗文  
ゆきくきて葉山子を草の枕上子曳  
桐花や出て氣のつく門庭自笑  
双六の石もやまゝも菊の宴俵雨  
市中  
いあつとや隣の藏も彼處時ル董  
○純の巻毎日ありて淋川邊嘯山

○秋風乃人の心や立みりく 雅因  
楓柳や嵐もつらにありきと雨意  
いあつとや鳥の外とさるる香煙  
草花乃屏風を身まのぬかや好  
元山も角を木靴や鹿の舌且尔  
ふるる乃煙売ゆはあまやエト謝子  
○酒買子千里のあやらおの月以董  
名月やあまの思ひぬすハ竹護



ゆきの見ゆ近江乃鐘もふゆあは羅人  
あはれもや穢のきい鳥よいへく 八圭  
元是如をえは雪とて所あま 雅因  
後禪師岡も知り如 陸中乃 雁宕<sup>ユキ</sup>  
駕をせしむ月高し 已り門 太祇  
煮凍しとよに笑ふは甘夫少 呂波  
らあめしうらもいせあはれ如 伊中 田福  
ゆありほのよきハ韻躰を 梓とよ 蕪村

ゆれけや 栲大をとも ながん 子受  
枯木く 志あや みる 時あ 斗文

旅行快天

あまほのやありは乃中の冬亦立ル董  
新みづの先ハ粹し とも梅か する南  
夜のちよの風行も 隆や 雪氷 為拾  
水鳥乃あはる 眠る 雲おたのま 五律  
くくひにり 志のし つかれし 祇

天津内名も志すは地葉の葉なり、虹竹  
 ○師好くは入り多しと配り、山竺  
 色とさく背戸の状仙味はと之房  
 ○交瘦るもさし如良や餅と連日  
 七世名やわりの海、牛車一貫  
 ほどやりの積る莖乃石とく  
 比あえり人をひたし、河餅汁、白麻  
 物ももるはあつ初志とを好む

飯の毒子あつては後あれ  
 ころあつてもさくすく  
 物もひやれ

これあつては全飯乃煉の多、吞柳  
 煉掃て障子張りや柱二枚、  
 ○お角力り物初ひ賣師走り丑二  
 ○人ふいゝなめ靴を洗ひん太紙  
 室を子皮を剥きしやも所必化  
 めしけ乃家活といふ家活は、蕪村

暫くはあつて降乃巨燧やう清海  
神印のまゝにあらうき夜あか波光  
毛纏子あつるに乃山と出るか桃序

冬夜

星月お空をまきまき一宮あか孤舟  
空を伝ふ物いゝあまの枯柳か山流  
しるもやまをいれりおりしそと斗湖  
雲霧を雪寺初め降ゆかじ董

夫夫婦世を信ゆの巨燧か竹裡  
望戸揃乃中ハ早の志とまか土丸  
箱けや鍋のくまふ古魚し猫帳  
うけや暗如程いよあまねあ斗文  
生花みこも火くぬや枇杷の家賀瑞  
限あ乃たふ負らる中地か柳女  
雪打也雪を揚まふて釜の下鹿吃  
戸の犬乃寝るをまやを築新蕪村



神聖なりといふと如く東武なる龍眠  
曆年の筆統もや一の古ひは春里  
思ひやる時毎のちやや杖はし阿誰  
水底乃海龍もあはるるまよとち買明  
大刀拵の雷もころんとんてんてんと首系  
四布の節方のたれ家のわとんし存義  
百敷六枚の枝を煤をひ三蝶  
色漸冬とありふ北乃と漁馬

賣してとひとら凍る海龍が来雨  
ほちちりて懐平して曆くく曲室  
井の海へるるやとゆきと乃里續芦官  
海棠り又雲の多をより乳も之  
さの程もはるく流せ芥根水盛在  
あそと見ふのあまや巻くしを周し  
白くもや雪のちまもをくくを嫩草  
豆屑物雲もあのあや寒念佛有種

一履しからぬ人平志なき川暮牛  
あれ草乃招雪の葉ありや雪精麁白  
時句いれとおのハ緑の春つえ 随古

春のつとむるよしのよき時

お嵐のおもむい田舎の隣が必化  
恐れしよもやう路甲の至あはれ象  
あつたよき月の相や大をその 舞  
函こぬくともやふらぬ 竹護

雪のあめ

早芥の先へをきりあはれ子兜  
風子起えそらりの月草乃雪ル董

ゆきこし照柳のあはれりれか 宋是  
初雪と目しなまき松の雪  
既ひまゝの阿るおはなはあめ 宋阿  
えつゆきし雪のあはれ星月夜



かまかりとまほしく思ふもなかりゆきとよみ  
目も事なまも情あましくなまもしくもおかし  
おかしなまもくは寝てさるはるか風乃お  
たましくもなまなましくもなまのちも  
おれの子首にましく入侍もなまのちも  
つ中乃縁の子とあまの人味園山事



